

序

21世紀に入り、がん診療は大きく変わってきました。がん病巣が小さければ内視鏡治療で、進行したがんでも大きな手術を行わず、抗腫瘍薬と放射線治療を併用して効果をあげています。放射線治療ではがん病巣へ正確に集中的に放射線が集められるようになり、抗腫瘍薬は抗がん剤から分子標的治療薬へ、個々の患者に合った個別治療へ、注射から内服薬、そして入院よりも在宅で治療する方向へ転換してきました。

がん診療の専門医を明確にしてほしいという患者からの要望もあり、また、より安心して専門的治療が受けられるように、専門医の育成が盛んに行われるようになりました。日本がん治療認定医機構ではがん治療認定医、日本臨床腫瘍学会においてはがん薬物療法専門医、その他のがんに関する専門学会においても専門医制度が発足しています。また、2007年4月に施行された「がん対策基本法」を基としてのがん対策推進計画により、がん撲滅と患者支援が加速され、その一環としても専門医の育成、研修が重要となりました。

本書は、がん診療の実際の医療現場における診断から治療まで、あらゆる分野において、その個々の領域の専門医ではなくとも「これだけは知ってほしい」と思われる基本知識と最新情報を中心として構成されています。従って本書は、がんの各領域の専門書としては少し物足りないかもしれませんが、がん診療医としてあるいはがん治療医として、ベースとなる重要なエッセンスが書かれています。全国でもがんの各領域すべての専門医がそろっている施設は少なく、またがん専門病院に勤めていても、いろいろな領域の専門医とディスカッションする際に、共通の知識として知っておいてほしい事項も網羅しています。そして、なにより単なる知識だけではなく、実際の診療に役立つ本であることを自負しています。

医師は自分の専門領域の知識と技術だけで診療していれば、それでよいわけではなく、他の領域の進歩を知っていてこそ、がん患者のための真の診療ができることを感じていなければなりません。例えば、放射線治療の専門医師は、内視鏡による手術の進歩や、分子標的治療薬の進歩などについても知っておく必要があります。それによって、患者に最もふさわしい治療が、安全に行えるからです。

本書により、医学生・研修医にも、がんプロの大学院生や若いがんの専門医にも、ベテラン専門医にも、そしてがん専門以外の臨床医にも、目まぐるしく進歩している実際のがん診療全般を知っていただきたいと思います。どの医師にも、実際の診療に、そして認定医やがん専門医の資格修得にも役立つものと思っています。個々の患者に合ったがん診療がしっかりと行われ、そしてがん患者の心にも添えることを願っております。

2010年1月

佐々木 常雄